論文指導と文法教育
― until 節に生起する動詞と現在完了をめぐって―

林　高宣*

Takanori HAYASHI

Thesis Writing Tutorial and How to Study Grammar: On Verbs in *Until*-clauses and Present Perfect

要　旨

大学において学生が英語学で論文を書くためには，関心を持って言語現象を観察・分析し，そのような言語現象がいかなる規則に従って発現しているかという点について仮説を立て，最終的に自らが立てた仮説を検証する能力が要求される．本稿では until 節に生起する動詞句を例として，実際の言語現象に説明を与える過程を観察し，そこから振り返って英語学分野での論文指導，あるいは文法教育における望ましい姿について考察する。

【キーワード：アスペクト，時制，文法教育】

１．はじめに

これまで日本で行われてきた英文法教育は，ある文法項目の基本構造を理解させた後，それをいくつかの用法に分類し，分類された用法に関してその特徴を記述していくというものであった。しかし，このようなやり方は，文法の学習は労力のわりに非効率的であるという印象を学生に与えたり，分類の暗記を優先させた結果，典型的な例文は理解できるものの，実際に英語の文を読む際には役に立たないといった事態を引き起こすことになる。

本稿では，英語学分野で大学生に論文指導する際，どのようなやり取りが教員と学生のあいだでなされているか，その結果いかなる文法教育が望ましいのかという点について，until 節に生起可能な動詞句の特徴を探る過程を振り返ることによって見ていきたい。また，これまでのような文法項目の「分類」をそのまま受け入れるのではなく，その分類の深層に存在する意味を探る試みが，大学における論文指導のレベルでは必要であることを現在完了について見ていく。

２．大学生に求められる能力

まず，英語学の論文を書く際に大学生に求められる能力について考えてみたい。英語学で論文を書くためには，当然のことながら言語現象に関心を持って言語を観察することが必要とされる。しかし，高校時代まで規範的な文法の習得を目標として学習してきた学生にとって，文法はいわば例外のない確立した規則体系であり，大学で英語学の授業を受けるまで「ことば」に対して疑問を持たない傾向が見受けられる。大学では高校までにない視点から言語現象に目を向けさせ，観察させることになる。

第２に，言語現象を観察した後，それを分析する能力が要求される。しかし，言語現象の分析には様々な知識・概念を習得していることが必須であり，このことなくして言語現象を分析することは容易ではない。入学後，着実に知識の習得を図ることが，論文を書くことを目標とする大学での文法教育には当然のこととして要求されている。

第３に，言語現象を分析し，そのような言語現象がいかなる仕組みに基づいて発現しているのか，いかなる規則に従っているか，という点について仮説を立てる能力が必要とされる。単に用法分類の段階にとどまっていては，高校までの文法と何ら変わるところはなく，「なぜそのような現象が起きるのか？」という疑問に答えることはできない。

最後に，自らが立てた仮説を検証する能力が要求される。仮説の妥当性を検証するために必要な証拠を収集したり，自らの仮説を他の理論と比較して優れた点を強調する，あるいは一見したところ仮説の例外と見なされる現象に説明を与えるなど，様々な方法が考えられるが，この段階まで到達しなければ，論文を書いて自説を展開する意味があるとは言えない。

以下では until 節に生起する動詞句を例として，実際の言語現象に説明を与える過程を観察し，そこから振り返って英語学分野における論文指導，あるいは文法教育とはいかなるものが望ましいのかということについて見ていきたい。

３．until 節に生起する動詞句

until 節に生起する動詞句は完結的な事態を表すものでなければならない，あるいは瞬時的な事態に限られるとされてきたが，実際には進行形も見られる。[1] ここでは，これまでの論考を踏まえつつ進行形を含めてuntil節に生起可能な動詞句の特徴を考察していきたい。

* 島根大学教育学部言語文化教育講座

3．1．観察

まず，until節に生起している動詞句について観察してみよう。

（1）a．Alex danced until the music stopped.
　　b．We waited until Mark washed the dishes.
（2）*He stayed here until the guest waited.
（3）a．I drank coffee until it was time for class.
　　b．*I drank coffee until I was in the kitchen.
（4）We saw each other a lot, and we were very close, but we didn't live together actually until he was dying. I took three months off work and took care of him.
　　（D. Steel, *The Ranch*）

(1a) では動詞 stop が until 節に生起し，(1b) ではwash the dishes という動詞句が生起している。これらの動詞句は問題なく until 節に生起可能である。しかし，（2）における wait は until 節に生起することができない。また，（3）では同じ動詞 be が until 節に用いられているが，(3a) は適格であり，(3b) は不適格となっている。さらに，進行形が until 節に生起する（4）のような例もある。

このように，一見したところでは until 節に生起する動詞句にどのような特徴があるか不明であり，分析の糸口すら見えてこない。そこで何らかの文法知識を習得することが必要となる。本来ならば，until 節にいかなる動詞句が生起可能かという課題に対し，言語現象の性質から判断して学生自らが分析に資するであろう文法項目を予測し，学習し始めることが最も好ましいが，事態は必ずしもそのように進まない。その際には教員から必要と思われる文法項目について提示することになる。

3．2．Vendler（1967）：分析1

Vendler によれば，動詞はアスペクトによって状態（state），行為（activity），達成（accomplishment），到達（achievement）という 4 つのグループに分類されるが，Smith（1997）は 4 つのグループを Static, Durative, Telic という素性の点から分析している。

（5）Temporal features of the situation types

Situations	Static	Durative	Telic
a．State	［＋］	［＋］	［－］
b．Activity	［－］	［＋］	［－］
c．Accomplishment	［－］	［＋］	［＋］
d．Achievement	［－］	［－］	［＋］

Static とは，出来事動詞（event verb）と状態動詞（state verb）によって表される事態を区別する素性である。状態動詞のみが［＋static］とされ，出来事動詞であるそれ以外の動詞は［－static］という素性を有することになる。

Durative は，動詞句が継続性を有していることを示す素性である。状態動詞によって表される事態（6a）は当然のことながら継続性を有しており，［＋durative］である。

（6）a．State: The spaghetti is soft.
　　b．Activity: Mark pushed the cart.
　　c．Accomplishment: Mark pushed the cart into the barn.
　　d．Achievement: The music stopped.

(6b) における行為動詞の場合も，「カートを押す」という行為が一瞬で成立するような性質を持つものではないため，継続性を伴って［＋durative］となる。(6c) の達成動詞の例も，「カートを押して納屋に入れる」という時間を要する事態を表しており，［＋durative］である。しかし，到達動詞を含む (6d) では状況が異なる。ここでは音楽が続いていた状態から 1 時点を境に音楽が止まった状態に切り替わることが述べられており，事態が継続性を持たないため［－durative］となる。

最後に Telic であるが，これは動詞句によって表される事態が内在的終結点を備えているか否かという点に関係してくる。状態は継続する事態であるため，当然内在的終結点を含まない。行為動詞 (6b) の場合も「押す」という事態が述べられているだけで，この事態に終結点は含まれないと考えられ，［－telick］となる。しかし，達成動詞が表す事態 (6c) では into the barn という前置詞句がつけ加えられたことによって，「カートを押して納屋に入れる」という終結点を内在する表現となり，［＋telic］となる。最後に到達動詞の例 (6d) も「音楽が終わる」という，まさに事態の終了を述べているため，当然［＋telic］という素性を有することになる。

それでは，アスペクトに関する知識を習得した段階で先に 3．1．で観察した例を振り返ってみよう。(1a) では until 節に動詞 stop が現れているが，アスペクトの点からこの動詞は到達動詞であると判断される。また，(1b) には動詞句 wash the dishes が生起しているが，これは「皿を洗い終わる」と解釈され，達成動詞に分類される。これらの動詞句は問題なく until 節に生起可能である。これに対し，（2）における動詞 wait は行為動詞であり，行為動詞は until 節に生起できないことが分かる。（3）ではどちらの例にも動詞 be が現れているが，(3a) の例は「授業の時間になる」と解釈され，アスペクトに基づいて判断すれば到達動詞である。一方，(3b) は「台所にいる」という事態を表しており，アスペクト的に状態動詞であることが分かる。ここから，行為動詞と状態動詞は until 節に生起できないと考えられる。最後に，（4）の例は進行形をとっているが，動詞 die は stopと同じ到達動詞に分類される。

3.3. until 節における動詞句のアスペクト制約：仮説1

以上からuntil 節に生起可能な動詞句は達成動詞と到達動詞であると考えられる。

（7）“Who gossiped such tripe? You'd better tell me. I'm not going to let you sleep until you tell me.”　(I. Wallace, *The Guest of Honor*)

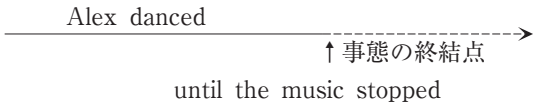
（8）Ellery watched his drooping shoulders until they vanished.
(E. Queen, *The Chinese Orange Mystery*)

（7）において until 節に生起している動詞句 tell meは達成動詞であり，（8）の動詞 vanish は到達動詞である。これらはともに［＋telic］という素性を有している。ここから次のような仮説を立てることができる。

（9）仮説1
until節に生起可能な動詞句は，［＋telic］というアスペクト制約に従っている。つまり，until 節に生起可能な動詞句が表す事態は終結点を内在している。

この仮説に従ってuntil 節による主節事態の境界化について見てみよう。

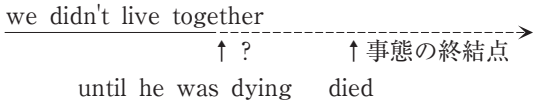
（10）until 節による主節事態の境界化
Alex danced until the music stopped.



先に示した (1a) は次のように説明される。実線の部分は Alex がダンスを踊るという事態が継続していることを表し，上向きの矢印の時点を境にその事態が終わったことが破線によって時間軸上に示されている。上向きの矢印は主節事態の終了点を表しているが，これは until 節の動詞句が表す事態である。つまり，until 節事態の終結点が主節事態を境界化していることになる。このように (10) の場合，仮説1に従って予測される通りに until 節に生起する動詞句の内在的終結点が主節事態を境界化しており，達成動詞，到達動詞が until 節に生起可能なことが分かる。

しかし，この仮説では説明できない例がある。到達動詞であっても進行形である（4）の場合には，die によって表される事態の終結点が主節事態を境界化しているとは言えない。

（11）We saw each other a lot, and we were very close, but we didn't live together actually until he was dying.



(11) において主節事態を境界化しているのは until 節であるが，until 節に生起している動詞 die が表す事態の内在的終結点は until 節事態よりも時間的に後に生起するからである。つまり，「死ぬ」という事態の終結点を考えれば，それは was dying によって表される事態より後に実現されることになる。

このように（10）においては，アスペクトのみからの分析で十分であるかに見えるが，アスペクトのみに従った仮説1では（11）を説明できず，再分析が必要となる。

3.4. 時制：分析2

次に関係してくるであろうと考えられる文法項目は時制である。上述の説明にあるように時間軸上における1点が主節事態を境界化するということは，境界化に時間が関係していると予測されるからである。ここでも学生に，until 節に表されている時が主節事態の境界化とどのように関係しているか，時間と関係する文法項目には何が考えられるか，といった問いかけをして，課題解決に資すると考えられる文法項目に気づかせる必要がある。それでは以下に時制について見てみよう。

英語の時制には単純現在と単純過去があるが，両者の違いとして最初に気づくことは事態がいつ発生しているかという点であろう。単純過去では事態が過去に発生し，単純現在では現在に発生している。ここから出来事時（point of event: E）という概念が認識されることになる。さらに単純現在の場合，出来事が現在に発生していると説明されるが，そこから現在とは何かということが問題となってくる。Reichenbach（1947）以来指摘されてきたように，これは発話時（point of speech: S）である。つまり，単純現在ではＳとＥが同時であると説明され，単純過去ではＥはＳよりも過去にあると説明される。

このようにＳとＥを認識することは比較的容易であるが，時制構造を構成するもう1つの要素である基準時（point of reference: R）は単純現在と単純過去を比較するだけでは認識されない。基準時Ｒを認識するためには単純過去と現在完了を比較する必要がある。単純過去も現在完了の経験用法も事態が過去に発生しているという点では違いがない。つまり，どちらの場合もＥはＳよりも過去に存在すると説明される。しかし，(12) から明らかなように単純過去では基準時Ｒが過去（Ｅと同時）に置かれ，現在完了では現在に置かれている。

（12）Point of Reference（基準時）

Simple Present	S, R, E
Simple Past	E, R__S
Present Perfect	E__S, R
Past Perfect	E__R__S

このように単純過去と現在完了を区別しているのは基準時Ｒということになる。現在完了は過去の出来事が現在に関係していることを表すと一般的に言われるが，これは基準時が現在に存在することであると説明される。さらに，過去完了に対して，過去における過去，あるいは過去のさらなる過去といった表現が用いられるが，これも（12）に示されているようにＳより過去にＲが存在し，それよりさらに過去にＥが存在するといった構造によって説明される。

また，基準時は時を表す副詞類によって具体的に記述されるという特徴を持っている。

（13）a．At 5 o'clock we heard a shot.
　　b．He was here from two o'clock until five.
　　c．He left yesterday.
　　d．At two o'clock he was reading a book.

(13a) では基準時が at 5 o'clock によって表されているが，ここでは瞬時的な R と銃声を聞くという同じく瞬時的な E が時間軸上で重なっていることが示されている。一方，(13b) では「彼がここにいた」という時間的に長さを持つ E が，from two o'clock until five によって表される R と時間軸上で重なっている。これらに対し，(13c) では一見したところ R と E の長さが異なっているように見える。leave は出発していない状態からある時点を境に出発した状態へ変化することを述べているため，到達動詞と解釈される。つまり，E は瞬時的である。これに対し，yesterday は24時間という長さを持つかに考えられる。しかし，(13c) は瞬時的な E が yesterday のある１時点と時間軸上で重なっていることを表しており，yesterday 全体を R としているわけではない。(13d) は E と R の関係が (13c) と逆になったパターンである。「本を読んでいる」という事態は当然長さを持つはずであり，瞬時的ではない。しかし，at two o'clock という R は瞬時的である。ここでも，瞬時的な R が時間的に長さを持つ事態の１時点と時間軸上で重なっていることが述べられている。

以下では，このような基準時がいかに until 節の境界化に関係するか，再度仮説を立ててみる。

３．５．達成動詞・到達動詞と基準時：仮説２

(14a) は到達動詞 reach を含む疑問文とそれに対する答えであるが，その答えは「正午きっかりに」というものである。

（14）a．At what time did you reach the top？
　　－At noon sharp.
　　b．At what time did you spot the plane？
　　－At 10：53 a.m.

(14b) にも到達動詞 spot が現れているが，ここでの問に対する答えも「午前10時53分に」となっており，どちらの場合にも長さを持つ期間ではなく，１時点によって答えられていることが分かる。つまり，到達動詞の場合，事態の終結点が R によってマークされることになる。[2]

これは達成動詞の場合も同様である。

（15）John built a cabin last summer.
　　(Smith 1997：29)

ここでも先ほど (13c) で見たように，last summer 全体が R として機能しているわけではなく，last summer の１時点が R として機能しており，小屋を建て終わった時点がRによってマークされている。

以上の到達動詞と達成動詞における観察から結論されるのは，これらの動詞句が境界として機能する場合，動詞句のアスペクトによってもたらされる事態の終結点が基準時 R によってマークされるということである。ここから以下の仮説を立てることができる。

（16）仮説２
　　到達動詞・達成動詞においては事態の終結点が瞬時的な基準時 R によってマークされている。つまり，基準時 R と事態の終結点は時間軸上で重なっており，これらが主節事態を境界化する。

３．６．until 節における達成動詞・到達動詞：仮説の検証１

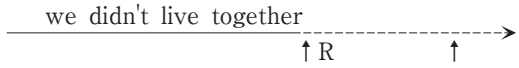
それでは (11) (12) を再度引用して，(16) の仮説を検証してみたい。

（17）until 節による主節事態の境界化
　　Alex danced until the music stopped.

一見したところ，(17) について説明する場合にはアスペクトによってもたらされる until 節事態の終結点を考慮するだけで境界化の説明が可能であるかのように思われる。しかし，これまでの時制を含めた分析からすれば，事態の終結点と共に基準時 R が主節事態の境界化に関係していることが分かる。until 節の動詞句が進行形でない場合，両者は時間軸上で重なっているため明確に区別されないが，(17) に示されるように，そこには事態の終結点と基準時 R の両方が関係しているのである。

これに対し，until 節に進行形が現れる場合は (17) と同様に事態の終結点と基準時の両方を備えているが，両者は時間軸上でずれていると考えられる。

（18）We saw each other a lot, and we were very close, but we didn't live together actually until he was dying.



ここから次のように結論することができる。until 節に生起可能な動詞句は達成動詞・到達動詞とされるものであり，until 節による境界化は動詞が単純形の場合（進行形ではない場合），時間軸上で重なった事態の終結点と基準時 R の両方によってなされ，until 節の動詞句が進行形の場合，R が主節事態を境界化する。つまり，達成動詞・到達動詞の単純形が until 節に生起する場合，事態の終結点と基準時 R が時間軸上で重なる無標のケースをなしている。一方，これらの動詞が進行形で until 節に生起する場合，事態の終結点と基準時 R が時間軸上でずれる有標のケースをなしている。

これまで until 節における進行形を1例しか扱ってこなかったが，実際には多くの例が見られる。その一部を以下に示す。

(19) a. After that I forgot about seeing Tavett and didn't remember until I was leaving the building. (BNC)
(その後，タベットに会うことになっていたのを忘れていて，そのビルを出ようとするときになってようやく思い出した。)

b. But those were the first and last meteorites found until the six week season was ending and the party was preparing to leave Antarctica. (BNC)
(しかし，それらは6週間の調査期間が終わりかけ，調査団が南極を離れようとしていたときまでの間に発見された最初で最後の隕石だった。)

c. He leaned forward until his head was lying against her shoulder. (BNC)
(彼は頭が彼女の方に肩にもたれかかるまで身を乗り出した。)

d. He rolled them slowly sideways until his body was covering hers. (BNC)
(彼はその男女二人を，男の体が女の体に重なり合うまでゆっくりと横に転がした。)

これらの進行形の中には事態の終結点ではなく，開始点を考慮しなければならない例もある。[3] しかしいずれにせよ，until 節に進行形が現れることは明らかである。

但し，学生が日常頻繁に使用している英和辞典には until 節に進行形が現れる例は見られない。

(20) a. Wait here until I come back.
b. Please listen until I'm finished.
c. Go straight on until you reach the station.
d. We waited indoors until the rain (had) stopped.
e. Let's wait until she has had her lunch.
f. She ran and ran, until she came to a small village.
g. I waited until noon/after midnight.
(『ジーニアス英和辞典（第4版)』)

(21) a. Lucy is staying with me for a few days until she finds/has found an apartment.
b. John ran until he was out of breath.
c. I drank coffee until it was time for class.
d. I was looking for an old jazz record, until I finally found it in London.
e. She walked and walked until at last she came to the exit.
f. I held his hand until he had calmed down a little. (『ウィズダム英和辞典（第2版)』)

(20) は『ジーニアス英和辞典（第4版)』からの引用であり，(21) は『ウィズダム英和辞典（第2版)』からの引用である。そして，(20g) 以外はすべて until 節の形を取っているが，これらには達成動詞・到達動詞の単純形が現れ，進行形の例は見られない。

辞書の役割が，学生にとっての規範文法の学習，習得を支援するというものである点を考慮すれば，そこに進行形を伴う until 節を記載することはできないのかもしれない。しかし，大学における英語学分野での論文指導の際には，規範から少し外れたかに見える言語材料が極めて貴重であり，規範的な例も含めてその根底にある言語のメカニズムを解明することに大いに貢献している。逆に規範的な例に慣れすぎると，ある意味，「ことば」に対して疑問を抱かないといった事態にもつながりかねない。高校まで規範的な文法に接してきた学生に揺さぶりをかけ，「ことば」に対して関心を持たせ，言語現象に説明を与えさせることが，大学での論文指導に求められている。

3.7. 参照点 (reference point)：仮説の検証2

3.6.において達成動詞・到達動詞の単純形が until 節に生起する場合，事態の終結点と基準時 R が時間軸上で重なる無標のケースをなしており，これらの動詞が進行形で until 節に生起する場合，事態の終結点と基準時 R が時間軸上でずれる有標のケースをなしていると説明した。これについてさらに検証してみたい。

(18) で見たように基準時 R と動詞 die によって表される事態の終結点が時間軸上でずれており，実際に主節事態を境界化するのが R であるとすれば，事態の終結点そのものは until 節による主節事態の境界化に関係していないと考えられるかもしれない。つまり，until 節の動詞句が単純形の場合も主節事態の境界化に関係するのは基準時 R のみであるという説明である。しかしながら，単純形の場合だけでなく，until 節に進行形が生起する場合も含めて事態の終結点は重要な役割を果たしている。それは事態の終結点が参照点 (reference point) として機能しているということである。

人間には，特定の概念構造を構築する際に，まず際立ちの大きい部分，すなわち参照点にアクセスし，そこからそれに関係する際立ちの小さい部分に接触して概念化するという基本的な認知能力が備わっている。

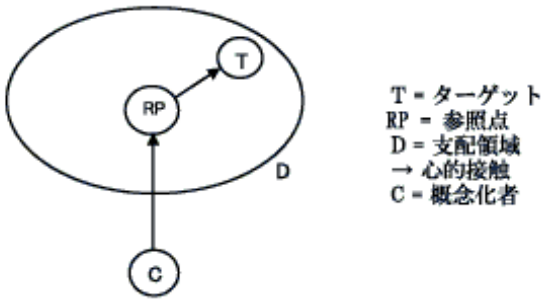


図1：参照点 (Langacker 1993)

概念化者，すなわち人間は，直接ターゲットを見ようとするが，直接ターゲットを見ることができない場合，まずはターゲットが見える地点である参照点へ心的接触を試みる。別の言い方をすれば，参照点へ視座を移動させ

ることになる。そして，その参照点からターゲットへ二次的に心的接触を図り，ターゲットを最終的に目にすることになる。until 節における動詞 die が進行形の場合にも，概念化者は認知的際立ちの低い基準時 R に直接心的接触を図ることが難しいため，die という動詞句のアスペクトによってもたらされる終結点を参照点とし，そこからターゲットである R へ心的接触を図ることになる。このように，到達動詞の進行形は参照点に基づいた構文であると考えられる。[4]

このような認知能力はその他の言語表現を構築する際にも働いている。

（22）参照点が関与する言語表現

a．所有表現

the doctor's wallet

b．メトニミー

The kettle is boiling./一晩で一升瓶を飲み干した。

(22a) は一般的な所有表現であり，参照点がいかに関与しているのかと考えられるかもしれないが，誰かに財布の話をする際，唐突に「財布」という表現を用いたとすれば相手に財布の具体的内容を理解してはもらえない。そこで話者は財布の所有者である doctor を参照点とし，そこから所有物である wallet へ心的接触を図り，(22a) を発話することになる。さらに，参照点を利用した言語表現に (22b) のメトニミーがある。メトニミーとは，一般的に「隣接性に基づく比喩」と説明される。The kettle is boiling. は英語の文として何ら問題なく自然である。しかし，実際にやかんを火にかけた場合，その形状が変化しているのは中に入っている水であり，やかんではない。つまり，人間は水と隣接関係にあるやかんを参照点とし，そこから水をターゲットとして認知的接触を図っており，その結果として (22b) のような表現が構築される。日本語についても同様である。「一晩で一升瓶を飲み干した。」という表現は違和感なく理解されるが，実際に誰かが一升瓶を丸呑みするわけではなく，ここでも一升瓶を参照点とし，そこから隣接する日本酒をターゲットとして心的接触を図った結果，このような表現が構築されるのである。[5]

4．「なぜ？」に答える文法教育

これまで本稿では，until 節に生起可能な動詞句がどのようなものであるか，また until 節が主節事態を境界化するメカニズムはいかなるものであるかという課題を解決して，論文を書く際になされる教員と学生のやり取りを見てきた。以上の流れを振り返ることによっていくつかの点が明らかになると思われる。ここでは論文指導において望ましいと思われる文法教育，あるいは文法指導についてまとめておきたい。

今回の課題は，until 節にいかなる動詞句が生起可能かというものであった。課題，題材の提示は教員からであってもよいし，学生自身が研究テーマを見つけて自らに提示してもよいが，この課題を解決する過程で学生はアスペクト，時制，参照点といった文法知識を習得した。大学での論文指導では特定の課題を解決するという，はっきりとした目的がある。つまり，ここでは課題を解決するために文法知識の習得が動機づけられている。文法知識の習得に関しては教員が逐一学生に教授していく場合もあると思われるし，今回のように課題解決に関係すると思われる文法項目を教員から学生に示し，それについて学生自らが習得していくケースもあると考えられる。本来は課題に即して学生が自ら予測を立て，関係するであろう文法項目を学習することが最も理想的であるが，いずれの場合でも動機づけが与えられることによって学生を意欲的に文法学習に取り組ませることができる。以上の過程において習得した文法知識は課題を解決するための手段であり，これらの文法項目を学習すること自体が目的ではない点も動機づけを高める一因となっていると考えられる。このようにして文法知識を習得させた結果，言語現象に対する学生の分析力を養わせることができた。

第 2 に，文法知識の習得には考えさせる文法教育が有効であろう。課題を解決する過程で仮説→検証→仮説→検証といった繰り返しが見られたが，学生に考えさせることは純粋に学生の思考力を養うだけでなく，文法項目のより深い理解につながると考えられる。例えば，時制について理解するため「単純現在と単純過去の違いは何か。」という問いかけをすることによって，学生は単純現在では事態が現在に生起しており，単純過去では事態が過去に生起していると考えるはずである。ここから，発話時 S と出来事時 E という2つの時点が認識される。また，事態が過去に生起しているという点では違いがないかに見える単純過去と現在完了の違いを問うことによって，そこに第 3 の時点である基準時 R が関係していることが理解されることになろう。さらに，この基準時という概念から過去完了における「過去の過去」といった特徴も説明される。学生にこれらの問いかけをした場合，期待される答えが返ってくることは少ないであろう。しかし，これらの問いかけから学生の意識を時制概念の構築へ向けさせることによって，時制概念についての理解は深まるはずである。

これとは逆の手法を用いて，時制という概念は S, R, E という 3 点からなる構造であり，単純現在では S, R, E という配列をなし，単純過去では E, R__S，現在完了では E__S, R であると説明したのでは，学生にとって時制の学習は単なる暗記作業に過ぎなくなってしまう。文法学習を単なる暗記作業に終わらせず，ことばについて考えさせることも文法知識の習得に動機づけを与える 1 つの要因となろう。

最後に，大学での論文指導は「なぜ？」に答える文法教育であることが重要である。本稿では until 節に生起可能な動詞句がどのようなものであるか，また until 節が主節事態を境界化するメカニズムはいかなるものであるかという，まさに「なぜ？」に答えたわけであるが，

英語学分野で論文を書き上げることは解明されていない言語現象に説明を与えることに他ならず，このような貢献がなされないとすれば論文を書く意味はないと考えられるからである。もちろん，言語現象に対する説明は仮説の域を出ないが，大学での論文指導に関して言えば，ある程度の論理的妥当性を示すことができれば十分であり，考え抜いて一定の結論に到達することが重要であると思われる。

以上の議論をまとめれば，大学では「ことばをより深く理解するための文法教育」といったものが必要になると言えるのかもしれない。

5．現在完了

この節では，学校文法における現在完了の用法分類とLeech（2004）の分類とを比較・検討し，現在完了の本質的な意味は何であるか，なぜ学校文法において現在完了が継続，完了，経験に下位分類されてきたのかという点について考え，大学の文法教育は用法分類の段階にとどまるのではなく，さらに踏み込んだ説明能力を持つものでなければならないことについて述べたい。

5．1．学校文法における現在完了

英語の現在完了は中学校で最初に学習することになるが，その基本的な用法は継続（I have wanted a bike for five years/since the fourth grade.），完了（We have just finished lunch./We have not finished lunch yet./He has already cleaned his room.），経験（Have you ever been to Sapporo？/I have never been there.）といった具合に下位分類され，それぞれの用法に特徴的な副詞類とともに説明されている。中学生が最初に現在完了という文法項目を学習する際には，このような下位分類はそれぞれの用法に特徴的な副詞類とともに現在完了の理解に役立つかもしれない。しかし，用法として違いがあるにもかかわらず，なぜ全ての用法に「have ＋ 過去分詞」という同一構造が用いられているのかという疑問も生じる。

江藤（2006）は，これまでの詰め込み式文法教育から脱却し，理解する文法教育への転換を提唱している。規範文法の特徴として，個別の文法項目の下位分類と分類された用法の詳細な説明が挙げられる。現在完了の用法も継続，完了（結果），経験に分類され，その意味や共起する副詞について説明されているのが現状である。江藤（2006: 40-41）は「これは現在完了の内容を理解するための手段ではあるが，この分類ができても現在完了そのものが分かったとは言えず，実際に正しく使えるとも限らない。したがって，この種の用法分類はテストのための知識であって，覚えても意味がないという印象を与えてしまう。」と述べている。「have ＋ 過去分詞」という構造に対して，江藤は「すでに完了した事実を現時点でもっている」といった基本的な意味を仮定し，これがコンテキストによって継続，完了，経験といった用法として具現化されると説明している。例えば，I have lost the watch. は「その時計をなくしたという，すでに完了した事実を現時点でもっている」という意味を表すと述べている。[6]「have ＋ 過去分詞」という１つの文法構造が，文法項目として１つの意味を有するという考え方は至極当然であり，説得力を持つものである。最終的に現在完了の下位分類を受け入れるにせよ，大学での文法教育では現在完了の基本的な意味を示し，なぜその意味が現状のごとく下位分類されているのかといった点まで説明するべきであろう。

但し，継続，完了（結果），経験といったこれまでの下位分類がコンテキストのみによってもたらされると言い切るのではなく，下位分類の説明についてはさらに詳細な分析が必要かもしれない。コンテキストを言語外の情報とすれば，それらの用法がコンテキストによって具現化されるという説明は当てはまらない。また，発話内容も含めてコンテキストであるとすれば，各用法はコンテキストによって具現化されることになるが，その場合でも下位分類は現在完了に用いられている動詞のアスペクトに影響を受けているため，本節では動詞アスペクトに焦点を当てて現在完了を見ていくことにする。現在完了と共起する動詞アスペクトを分析することにより，現在完了がこれまでのように下位分類されてきた原因が明らかになる。

5．2．Leech（2004）

Leech によれば，江藤が言うところの基本的な意味として現在完了は「現在までの期間」と「現在時に存在する結果」を表している。その上で現在完了に生起する動詞を状態と出来事に分け，現在完了を「現在まで継続する状態（state-up-to-the-present）」「不特定の過去（indefinite past）」「現在まで継続する期間における習慣（habit-in-a-period-leading-up-to-the-present）」「結果を表す過去（resultative past）」の４種類に下位分類している。これらのうち「現在まで継続する状態」の用法のみが状態動詞と共起し，それ以外は出来事動詞と共起する。

（23）「現在まで継続する状態」
　a．We've lived in London since last September (i.e.‘London is where we are living now’).
　b．That house has been empty for ages.

（24）「不特定の過去」
　a．Have you been to America？
　b．Have you visited the Gauguin exhibition？ (i.e.‘while it has been on’).

（25）「現在まで継続する期間における習慣」
　a．Mr. Phillips has sung in this choir for fifty years.
　b．I've always walked to work.

（26）「結果を表す過去」
　a．The taxi has arrived (i.e.‘The taxi is now here’).
　b．Someone has broken her doll (‘The doll is now broken’).

学校文法における下位分類では，(23) と (25) は共に継続に含まれることになる。(23) では状態動詞が使われているため，当然継続と解釈される。一方，一回ごとに発生して終了する事態は，繰り返されることによって「習慣」として解釈され，結果的に継続に分類される。しかし，学校文法において継続とされる現在完了に，状態動詞と出来事動詞の両方が用いられていることはあまり指摘されない。「現在まで継続する期間における習慣」を出来事動詞と共起するものとして独立させている点で Leech の下位分類はそれなりの意味があると言える。

5．3．現在完了の意味

しかしながら，Leech による下位分類はそれぞれ学校文法で用いられる継続，経験，完了（結果）のいずれかに対応しており，学校文法における下位分類も Leech によるそれのいずれかと対応している。

5．2．で述べたように，状態動詞が用いられるか出来事動詞が用いられるかによって「現在まで継続する状態」と「現在まで継続する期間における習慣」に分けられてはいるが，これらはいずれも学校文法では継続と分類される。つまり，Leech による 2 つの下位分類に対し，継続として収斂される 1 つの意味が仮定されるということである。

また，Leech の下位分類において出来事動詞と共起する「不特定の過去」は，学校文法では経験 (24a) と完了 (24b) にそれぞれ分類されている。「不特定の過去」が完了と経験に区別される原因は事態に対する話者の主観的な捉え方にあると考えられる。話者が出来事を現在から心理的に近いものと見なす場合，現在完了は just, yet, already などの副詞類とともに用いられ完了と解釈される。一方，事態を心理的に遠いものと見なしている場合には頻度を表す副詞類とともに用いられて経験と解釈されることになる。つまり，学校文法では心理的距離によって完了と経験に区別されるが，「出来事が過去に発生したが，それがいつであるのか特定できない」という観点からすれば，Leech の主張に従って両者を 1 つの用法と見なして問題ないであろう。つまり，ここでも学校文法における完了と経験は「不特定の過去」に収斂されることになる。

さらに，Leech は出来事の結果が現在でも効力を持つことを示す用法として「結果を表す過去」を下位分類している。これは学校文法で言うところの完了（あるいは結果）の用法に相当する。I've recovered from my illness. から I'm now well again. が含意されることによって Leech は，これを 1 つの下位分類としているが，完了と結果状態は表裏一体の関係であり，切り離して考える必要はないと思われる。出来事動詞は現在完了と共起して完了アスペクトを表すが，1 つの事態が完了すれば，新たな結果状態が存在するのは当然である。ここでも，「結果を表す過去」は「不特定の過去」（あるいは完了）に収斂されることになる。

以上の観察から現在完了の基本的な意味について考えてみよう。江藤は「すでに完了した事実を現時点でもっている」といった意味を仮定している。しかし，これでは現在完了に状態動詞が生起することが説明できない。そこで本稿では，現在完了の基本的な意味を「過去に起った，あるいは始まった事実が現時点に影響を与えている」と仮定したい。この意味とともに状態動詞が用いられれば，つまり動詞アスペクトが状態であるならば，(23) のように「過去に始まった状態が現在まで続いている」といった意味を表すことになり，学校文法において継続と下位区分される。また，行為動詞が表す事態も内在的終結点を持たないため，I've wanted to mention this for a long time./I have always thought that jazz is inferior to classical music. のように継続と解釈される。さらに，達成動詞であっても繰り返される事態を表していれば，(25) のように「過去に始まった習慣が現在まで続いている」と解釈され，同じく継続と下位区分される。

これらに対し，達成動詞の表す事態が繰り返されない場合や到達動詞では，先に述べたように心的距離によって「過去に始まった事実が現時点で完了した」「過去に起った事実を現時点で経験として持っている」と解釈され，完了あるいは経験として下位区分されることになる。

本節では，現在完了自体の意味と動詞アスペクトについて考え，1 つの文法構造には基本的に 1 つの意味しか存在せず，動詞アスペクトの解釈と現在完了という文法項目が持つ意味との整合性から下位分類がなされていることを主張した。

注

1 出水（2002）では，until 節に生起可能な動詞句について説明が試みられているが，その説明は個々の例に対して個別の説明を与える用法分類の段階にとどまっている。

2 あるいは事態の到達点と呼んだ方が適切かもしれない。

3 (19c)（19d）の場合には（19a）（19b）と異なり，主節事態を境界化する基準時は事態の開始点以降に存在している。つまり，到達動詞・達成動詞の場合と異なり，基準時は事態の開始点に後続することになる。

4 (19c)（19d）でも基準時が主節事態を境界化する機能を果たし，事態の開始点は参照点として機能している。

5 また，日本語では主語が「は」「が」によって表されるため，（ｉ）は 2 重主語構文などと呼ばれたりする。

（ｉ）太郎は鼻が低い。

ここでも「太郎」は参照点であり，上位の節に埋め込まれた「鼻が低い」という節をターゲットとした認知活動が反映されている。

6 江藤は，このような意味を「超直訳」と呼んでいる。

参考文献

江藤裕之．2006．「「実用的」な文法教育とは」『言語』vol. 35-No. 4: 38-43.

出水孝典．2001．「until 節内の動詞句のアスペクトと解釈」『英語語法文法研究』第 8 号，141-155.

Langacker, R. W. 1993. "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.

Leech, Geoffrey N. 2004. *Meaning and the English Verb* (Third Edition). Pearson ESL.

Reichenbach, H. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York: Free Press.

Smith, Carlota S. 1997. *The Parameter of Aspect* (Second Edition). Kluwer Academic Publishers.

内木場努．2004．『「こだわり」の英語語法研究』．東京：開拓社．

Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

辞書・コーパス

BNC ＝The British National Corpus.

Collins COBUILD English Language Dictionary (5th edition). 2006.

『ウィズダム英和辞典（第 2 版）』2007. 東京：三省堂．

『ジーニアス英和辞典（第 4 版）』2006. 東京：大修館書店．

NEW HORIZON English Course 3. 2009. 東京：東京書籍．